

特別な支援を必要とする子どもの保護者と教師との連携における課題
—学校における保護者の支援ニーズへの対応—

三宅 幹子

福山大学こころの健康相談室紀要 第6号 別刷

2012年3月

特別な支援を必要とする子どもの保護者と教師との連携における課題

—学校における保護者の支援ニーズへの対応—

三宅幹子

福山大学人間文化学部心理学科

キーワード：特別支援教育，連携，保護者

特別支援教育の開始から数年が経過し、各種取り組みが推進される中で、校内委員会の整備やコーディネーターの指名といった体制整備の段階から、それらの機能の発揮や関係機関との連携による児童生徒への効果的な支援の保障へ、という段階に入ったことが指摘されている（高田，2010；岩田・山崎，2011）。このことから分かるように、有効な取り組みを行うための重要なポイントの1つとして、関係者、関係機関の間の連携があげられる。連携の実態についての調査からは、様々な成果や課題が報告されてきているが（たとえば、岩田・山崎（2011）、倉盛・三宅・荒木・井上・杉山・金田・秦野・廣利・西川・坂田・山崎，（2009）など）、ここでは保護者と学校との連携に焦点をあて、学校における保護者の支援ニーズへの対応と保護者との連携作りについて検討する。

学校と保護者との連携については、「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」（文部科学省，2005）においても保護者への説明や情報提供の一層の充実が必要であることが示されてきており、また、特別支援教育においては、保護者支援も重要な課題であることが指摘されている（吉利，林，大谷，来見，2009）。

しかし一方で、学校教師にとっては、保護者との連携や保護者支援は難しい課題とみられていることも事実である。栗原・長谷川・藪岸・植谷（2004）は、幼稚園および小・中学校教師を対象に「軽度発達障害があると思われる子どもの指導において、日々の教育活動の中で困難を感じていること」を調査し、困難を感じていることの1つに保護者との関係作りがあげられることを示している。岡本・網谷（2008）では、「発達障害のある児童の担任教師の悩み尺度」を作成する中で、発達障害のある児童に関わる教師の悩みの1つとして、保護者との連携の難しさが存在することを示している。またこうした研究知見から、奥本（2011）は「保護者にどのように伝えたら良いか」「保護者からの要望を抱えてしまう」「保護者との連携に気を使った」など、現場教師は保護者への対応と連携についての負担感を持っていることを指摘している。

教師と保護者との連携を難しくする要因の1つとして、両者の間での子どものとらえ方のズレを指摘することができる。馬場・田中・船橋・富田・藤尾（2007）では、発達障害のある子どもの保護者と担任教師を対象に、両者の課題意識の相違を検討した結果、発達障害に関する情報や知識の広まりにより、保護者と担任のそれぞれが発達障害への知識理解を深め、子どもの状態をとらえる視点が増えたことで、両者の課題意識の相違が大きくなってきているとの見解を示している。また、同じ子どもでも、場面や環境が異なれば当然状態像は変わってくるわけで、家庭での様子と学校の教室場面とでは、子どもの様子自体に差異があったとしても不思議ではないし、その片方しか熟知していない保護者と教師では、子どものとらえが異なることも十分ありえよう。このような子どもに対するとらえの相違は、保護者と教師との共通認識をつくりにくくし、支援目標や支援方法についての考えの相違を生じさせると考えられる。もちろんこれだけではなく、学校現場において、保護者のニーズに十分に対応する手立てが見つからないために難しさを感じている場合もあると考えられるが、共通理解ができていないために支援目標を共有できないことからくる難しさも十分に予測される。

こうした問題意識から、本研究においては、学校教師が保護者のニーズについてどの程度対応の難しさを感じているか、また保護者のニーズと学校においてできることとの間にどの程度ズレを感じているか、また、ズレを低減するためのどのような手立てを持っているか、といったことについての実態調査を通して、学校における教師と保護者とのより良い連携作りやより良い保護者支援について考察することを目的とする。

方法

調査日時・調査参加者 2010年9月に行われた、F市内の幼稚園・小学校・中学校教諭等で構成される特別支援教育研究会の研修に参加していた、幼稚園教諭、小・中学校教諭、特別支援学校教諭等が調査参加者であった。そのほとんどが在籍校において特別支援教育コーディネーターであったり、特別支援学級や通級指導教室の担当者であった。調査の趣旨を説明し、参加の同意が得られた25名を対象に調査を実施した。

研修会の実施概要 研修会は「学校でできるピア・サポート」と題した講義を中心に行われ、発達の課題を抱える児童の在籍する通常学級における学級経営や仲間関係作りの取り組みの重要性、および、ピア・サポート・プログラムを用いた仲間関係作りのアプローチの実践紹介を中心に構成されていた。実施時間は2時間であった。

調査方法・内容 調査は無記名式で、研修会終了時に集団で実施した。調査内容は次のとおりであった。(1)保護者の支援ニーズへの対応の難しさ:「特別な支援の必要なお子さんの保護者から学校へ要請される支援について、対応が難しいと感じたこと」について、①学習面について、②社会性・集団適応について、③身辺自立について、④その他、の4つの領域別に自由記述で回答を求めた。(2)保護者の支援ニーズと学校現場でできる支援とのズレ:「保護者のニーズと学校現場でできる支援のズレで困ったこと」について、①出現頻度について、「1.特になし」から「4.非常に多い」までの4段階で評定を求めた、②保護者の支援ニーズと学校でできる支援とのズレを低減するために行っている対策や工夫について自由記述で回答を求めた。

結果と考察

回答に不備のなかった18名のデータを対象として結果の分析を行った。

(1) 保護者の支援ニーズへの対応の難しさ

「特別な支援の必要なお子さんの保護者から学校へ要請される支援について、対応が難しいと感じたこと」として、①学習面について、②社会性・集団適応について、③身辺自立について、④その他、の4領域において記述された内容をTable 1に示す。

あげられた難しさの内容を領域別にみると、①学習面、および、②社会性・集団適応については、大きく分けて2つのタイプの困惑感が読み取れる。すなわち、1つめは、教員からみて子どもの実態にそぐわないと考えられる(難しすぎる、子どもの特性に合っていないなど、子どもの実態からみて適しているとはいえない)指導や関わりを期待されることであり、2つめは支援スキルや学校の体制等の関係から、有効な手立てを講じるもしくは提示することが難しい課題にどう取り組むか、という点である。特に前者に関しては、保護者が学校での子どもの実態を把握しにくいことにも起因すると考えられる、保護者と教師との間での子どもの状態のとらえの食い違いが背景にあると考えられる。

③身辺自立については、保護者からのきめ細かい支援の希望に対して、通常学級の中での対応の限界を感じていることや、手だての不足、および家庭での教育・指導が特に直接的に関わる領域であることから、家庭との連携や家庭での取り組みの推進が課題としてあげられていた。保護者からの要求に十分に対応できるような体制や手だてが不足していることに苦慮する側面と、保護者側がしっかり取り組めていないことに難しさを感じる側面の2つがあることがうかがえる。積極的な取り組みを進めようとするからこそその難しさを感じていることが指摘できる。本調査の参加者が、自主的な勉強会に参加するような積極性の高い教師であったことを反映する結果なのかもしれない。

上記の他、良いところを見てほめることの大切さは分かっている、ついできていないところに注意が引かれてしまいがちになる、場合によっては保護者と学校との板ばさみの状態になることなどもあげられていた。

Table 1 学校教師が対応の難しさを感じている保護者からの支援ニーズ

領域	記述内容
①学習面	<ul style="list-style-type: none"> ・遅れてでもよいから、みんなと同じことをさせて欲しいという希望があるが、運動面、製作遊びなど、その子の発達の実態から考えると無理をさせてしまうことになり、“やらされた活動”になってしまう。教員側も教材・指導の工夫がけっこう大変。 ・支援学級在籍児の保護者から「もっと教科の学習をして欲しい」という希望があるが、児の実態からは難しいと感じている。 ・[子どもの実態から考えると難しいが、現在在籍している]学年の学習内容を理解させてほしい。 ・お金の計算ができるようになってほしい。 ・本人の興味のあることから学習へ興味づけをしてほしい。 ・個別の指導時間をとってほしい。 ・[授業の中で]ポイントを指示してほしいという希望があるが、その子だけに、という訳にはいかないで、学級全体で行うための良い方法がないかを考えている。
②社会性・集団適応	<ul style="list-style-type: none"> ・ザワザワした場が苦手な子どもについても、みんなと同じように参加させてほしいという希望。 ・一人で本を読んで過ごしてしまいがちなので、仲間との関わりを持たせてほしいという希望。 ・起きた事象の善悪だけを取り上げて注意を受ける [その事象の背景について共通理解を得られない状態]。 ・友だちと一緒に行動できるよう配慮してほしい。 ・友達をたたいたり暴れないようにしてほしい。 ・一人で生活できる力をつけてほしい。 ・[保護者からの希望というわけではないが]『時間やルールが守れない』と担任から言われ、どうしたらいいかと保護者からの相談を受ける。
③身辺自立	<ul style="list-style-type: none"> ・配布物がきちんと子どもに渡り、持って帰ることができたかを [小学校高学年の40名弱の通常学級において] かなりきめ細かく報告させ、確認することを求められる。 ・排泄・食事など園での支援・指導に頼っていて、家庭では取り組んでいない状況がある。やり方・工夫などを保護者と一緒に考えても、家庭の中ではやり切れていない様子が見受けられる。 ・友だちとのトラブル、忘れ物、次の日の準備について、何度指導しても本当に理解しているのかわからないので、どうしたらいいのか [手立てに窮している]。 ・排泄のタイミングをつかんで、できるようにしてほしい。 ・ほめて認めてほしい。
④その他	<ul style="list-style-type: none"> ・やる気をおこさせるように言葉がけなど。しかし、本人のこまった行動について目がいいてしまいがちになる。 ・通常学級へ戻りたいという希望。 ・通級指導教室担当なので自分の学級では特に難しさはないが、在籍校が保護者の希望を受け入れないことがけっこうあるので、[学校と保護者との間で] 困っている。

注. [] 内は、意味内容を明確にするための著者の加筆である。その他にも文意の伝わりにくい部分等については、意味内容が変わらない程度の微修正を行って掲載している。

(2) 保護者からの支援ニーズと学校現場でできる支援との間のズレ、および、ズレを緩和するための手立て

保護者からの支援ニーズと学校現場でできる支援との間のズレに困ったことがどの程度あるかを尋ねた結果、Figure 1 に示す結果となった。困ったことは特にないと回答したのは3名（17%）のみで、8割以上の教師が、程度の差はあってもズレに困ったことがあると回答していた。また、「4.非常にある」もしくは「3.かなりある」と回答した教師は6名（33%）いたが、そのほとんどが特別支援教育コーディネーターや通級指導教室を担当しており、保護者と通常学級担任（あるいは学校）の間を取り持つ役割を担う立場の教師であった。

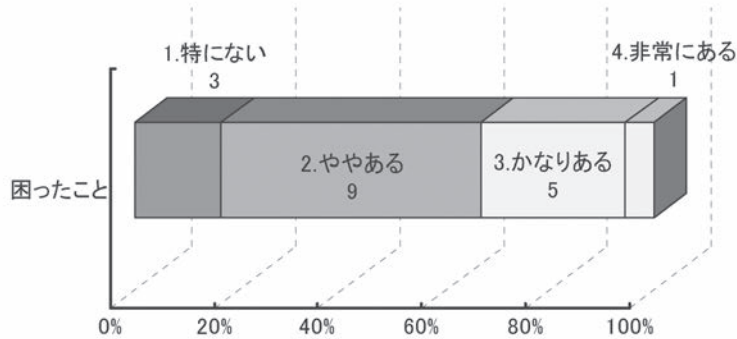


Figure 1 保護者からの支援ニーズと学校現場でできる支援との間のズレに困ったこと

次に、ズレを緩和するための手立てについて自由記述内容を整理してみると (Table 2), 「保護者とのコミュニケーション・情報交換・関係作り」「保護者と協同での事例検討・研修」「保護者間の関係作り」「支援の手立ての工夫・ブラッシュアップ」「校内体制作り」の5つのカテゴリーに分類することができた。

「保護者とのコミュニケーション・情報交換・関係作り」では、コミュニケーションを綿密にとるための方法や情報共有・共通理解を作るための方法の工夫、まずは保護者を受容することで関係を作るなどの手立てがあげられていた。「密に」「直接」「よかったこと」「成功例」「がんばり」など、伝え方の留意点を記述された回答が多く、いかに伝えるかが重要な要因であることを意識した実践が行われていると推測される。この点に関して、学級担任と保護者との有効な連携構築のポイントについて検討するために、ADHD 児を担当する学級担任への半構造化面接を実施した木村・芳川 (2006) では、保護者との協力援助関係を形成する上で重要な情報伝達の方法として、問題場面のエピソードを保護者に伝える際に、①事実のみを伝えるのではなく、エピソードに至る前の状況、要因と背景、プロセスをすべて伝えること、②エピソードを伝える際、なるべく肯定的に話をするほうが保護者との友好的な関係を築きやすいことを指摘している。また、山岡 (2007) は、保護者との連携に関して、保護者の認識、障害受容の度合い、性格等による対応方法の留意点を指摘している。たとえば、特別扱いを拒絶する保護者の場合には、目立たない範囲での配慮や支援から始める必要があるとし、わが子への思いが強く周囲が見えにくくバランスを欠いた過度の要望をしてしまう保護者の場合には、受容と共感を大切に保護者の気持ちを受け止めることを重視した関わりから始めることが求められるという。

「保護者と協同での事例検討・研修」では、事例検討や研修により、お互いに子どもの理解を深めたり有効な支援方法を学ぶだけでなく、話し合いを通して共通理解をつくることやお互いの見通しや願いをすり合わせる作業も含まれていると考えられる。竹内 (2008) では、担任、保護者、著者の3者による相互コンサルテーションによる取り組みの事例を報告しているが、相互コンサルテーションにおいては、場面によってコンサルタントとコンサルティの立場が入れ替わり、担任は学級での、保護者は家庭での観察にもとづいた情報提供を行い、意見

要望や修正案を出し合って双方が主体的に参加しながら、有効な支援につなげることが目指されている。どの程度専門的なバックアップが得られているかは取り組みによっても異なるとは考えられるが、こうした形に近い連携が行われているのではないかと推測できる。

「保護者間の関係作り」では、障害受容や子どもの理解、子どもへの効果的な支援スキルの獲得など、多くの課題を抱える保護者にとって、同様の課題を抱える親同士の関係を持つことは、単なる情報提供のネットワークとして機能するにとどまらず、学校の教職員とは違った立場からの違ったサポートが期待できると考えられる。軽度発達障害児の保護者を対象に、グループワークによるセルフヘルプ機能の促進について検討した小林(2004)においては、親同士が感情を分かち合い相互に支え合うようなセルフヘルプ機能に注目して、その促進を試みているが、自分の悩みや不快な感情について語るには、メンバー同士の相互の信頼や安心感が必要であり、相互に批判しあったり、人間関係のわずらわしさを懸念する必要がない状態で交流できるような場作りが必要であると指摘している。こうした視点に立って、親同士の相互のサポート機能を助長する場が学校の中に用意できれば、保護者支援として有用であると同時に、学校と保護者の連携にとってもプラスに働くと考えられる。

Table 2 保護者の支援ニーズと学校現場でできる支援とのズレを緩和するための手立て

カテゴリー	記述内容
保護者とのコミュニケーション・情報交換・関係作り	<ul style="list-style-type: none"> 子どもはもちろん、保護者との連絡を密にする。家庭での様子を聞き、園での様子も伝えていく。 保護者と直接話す機会を増やす(放課後児童クラブのお迎えのときなど)。 気になることやよかったことも保護者に直接伝える、又は連絡帳で日々の様子を伝える。 「学校で〇〇したら、□□できた」といった、成功例や児童のがんばりを知らせ、「今後△△したい」と目標や見通しについても伝える。 保護者へのお願い、連絡をしていく。 まず保護者を受け入れることでの関係づくり。
保護者と協同での事例検討・研修	<ul style="list-style-type: none"> 実際の指導や子どもの作品を保護者に見てもらって、園での目標についてそのつど相談している。すぐには共通認識に立てないこともあるが、お互いの思いをしっかりと話し合えるようにしている。 特別支援の交流、研修をしている。
保護者間の関係作り	<ul style="list-style-type: none"> 先輩の保護者からのアドバイスやたわいもないおしゃべりの機会を設けられるよう、保護者間の関係を取り持つようにしている。
支援の手立ての工夫・ブラッシュアップ	<ul style="list-style-type: none"> 本人の興味のあることから学習への興味づけをする。 [交通手段のない地域なので、卒業後原付免許を取らせてほしいという希望について] 免許試験のための学習をする。既存の公共交通手段についても活用の仕方を学習する。 いろいろ学ぶ中で、自分なりにできることをしてみる。よい方向で変容が見えたら継続し、見えなければ他の方法へ変更して、取り組みをしていく。
校内体制作り	<ul style="list-style-type: none"> 通常学級の担任と色々な場で話し合っているが十分ではない。 一人で抱え込まずチームで対処・解決するようにしている。 保護者と学校、両方からの相談があれば一緒に検討できる。ただし、学校からの依頼がなければ動けない。

注. [] 内は、意味内容を明確にするための著者の加筆である。その他にも文意の伝わりにくい部分等については、意味内容が変わらない程度の微修正を行って掲載している。

「支援の手立ての工夫・ブラッシュアップ」については、具体的な支援方法の工夫や、子どもに適した支援法を見つけるための手立てが述べられているが、このような道具的なサポートは、他のタイプのサポートに比べて、発達の課題を持つ子どもの保護者にとっては、特に重要であることが示されている。具体的には、特別な支援ニーズを持つ子どもの母親に対する教師からのサポートの種類と、それに対する母親のとらえ方との関係を検討した上村・石隈（2000）において、教師から提供される3タイプのサポート（指導的サポート：子どもや母親の問題となる行動を指摘したりアドバイスや情報提供を行うことで行動改善を期待すると考えられるサポート；道具的サポート：個別に支援に時間を割いたり、教材を準備するなどの時間や労力を提供するサポート；情緒的サポート：母親の頑張りをねぎらったりポジティブに評価するなどのサポート）のうち、LD およびその周辺の子どもの母親にとっては、道具的サポートが最も援助的であると感じられやすく、また、教師と一緒に取り組もうという気持ちを抱かせることが示されている（上村・石隈, 2000）。このような道具的サポートの重要性については、担任教師と保護者の連携による相互コンサルテーションの試みを報告している竹内（2008）によっても指摘されている。

「校内体制作り」については、校内の連携やチームでの支援があげられている。チームでの支援は特別支援教育の基本であるが、保護者支援のためにも重要な点であり、各種支援の手立てを効果的に実施する上での基盤にもなると考えられる。

こうした手立てにより、保護者の子ども理解を深め、保護者の支援ニーズを子どもの実態に沿うものへと変容させていくことがねらわれているのであるが、一方で教師側もそのプロセスを共有する中で、子どものとらえや保護者の思いへの理解を深めるため、保護者と教師とが子どもの特性や課題、めざすところについての共通認識を持ち、支援目標や支援方法についての考えをすりあわせることにつながると考えられる。調査参加者の中には、上記の手立てのうち、複数の手立てをあげる教師もおり、手立てのバリエーションを持つことにより、それらの相乗効果でより効果的に保護者支援が行われたり、広い守備範囲を持つことにつながっていると考えられる。

上記の結果をまとめると、保護者の支援ニーズへの対応に困難を感じる場合のパターンとして、子どものとらえの食い違いや課題認識の食い違いによるもの、有効な手だてが提供できないケースについての苦慮、家庭と足並みをそろえて支援を展開できないことへの苦慮などがあげられた。また、8割以上の教師が、程度の差はあっても保護者の支援ニーズと学校現場で提供できる支援とのズレに困ったことがあると回答しており、特に特別支援教育コーディネーターや通級指導教室担当教師のように保護者と通常学級担任（あるいは学校）との間を取り持つ役割を担う立場の教師はこうした悩みが深刻になりがちであると考えられる。そうしたズレを緩和するための手立ては「保護者とのコミュニケーション・情報交換・関係作り」「保護者と協同での事例検討・研修」「保護者間関係作り」「支援の手立ての工夫・ブラッシュアップ」「校内体制作り」の5つにまとめられ、複数の手立てを併用することで、より効果的な保護者支援が可能になると考えられた。

最後に本研究の問題点として、データが少なく、子どもの年齢別の分析や校種別の分析、教師の立場や役割別の分析を行うことができなかったことがあげられる。年齢段階や校種、教師の立場や役割によっても抱える課題やそれへの手立ては異なると考えられ、そうした条件別の検討は必要である。また、データが少数であることに加えて、今回の調査参加者は自主的な研修会の場に参加している教師であったことから、比較的積極的に支援に取り組んでいる教師からの声であることを加味して結果を解釈しなければならない。

引用文献

馬場広充・田中栄美子・舟橋奈生子・富田光恵・藤尾知成（2007）. 発達障害のある子どもの保護者と担任の課題意識の相違 香川大学教育実践総合研究, 15, 103-110.

- 岩田雅美・山崎由可里 (2011). 和歌山県下の小中学校での特別支援教育における各種関係機関・専門機関との連携の現状と課題 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, **61**, 51-58.
- 木村光男・芳川玲子 (2006). AD/HD 児を巡る特別支援教育コーディネーターの役割に関する研究—学級担任と保護者の連携において— 横浜国立大学教育人間科学部紀要 I 教育科学, **8**, 275-285.
- 小林 真 (2004). 軽度発達障害児の保護者を対象としたグループワーカーセルフヘルプグループとしての機能を高める試み— 富山大学教育学部研究論集, **7**, 15-18.
- 倉盛美穂子・三宅幹子・荒木久美子・井上孝之・杉山弘子・金田利子・秦野悦子・廣利吉治・西川由紀子・坂田和子・山崎 晃 (2009). 保育支援の実態とニーズ—保育所・幼稚園と関係機関との連携のあり方 臨床発達心理実践研究, **4**, 78-87.
- 栗原輝雄・長谷川哲也・藪岸加寿子・植谷幸子 (2004). 軽度発達障害があると思われる子どもに対する集団の中での指導について—津市立教育研究所主催の研修会に参加した教師へのアンケート調査から— 三重大学教育実践総合センター紀要, **24**, 21-28.
- 文部科学省 (2005). 特別支援教育を推進するための制度の在り方について (答申)
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05120801/018.htm>
- 岡本尚子・網谷綾香 (2008). 発達障害のある児童に関わる教師の悩みとストレス反応の関連 佐賀大学教育実践研究, **25**, 147-156.
- 奥本早紀 (2011). 発達に課題を抱える子どもを受け持つ通常学級担任教師のストレス 福山大学こころの健康相談室紀要, **6**, (印刷中) .
- 高田敬子 (2010). ユーザー主体の連携支援を目指した特別支援学校コーディネーターの取り組み—幼稚園から小学校への移行支援を通して— 特別支援教育コーディネーター研究, **6**, 39-50.
- 竹内健司 (2008). 担任・保護者と連携する相互コンサルテーションの試み—通常学級に学ぶ発達障害児を支援する取り組みとして— 特別支援教育コーディネーター研究, **4**, 13-19.
- 上村恵津子・石隈利紀 (2000). 教師からのサポートの種類とそれに対する母親のとらえ方の関係—特別な教育ニーズを持つ子どもの母親に焦点をあてて— 教育心理学研究, **48**, 284-293.
- 山岡 修 (2007). 特別支援教育コーディネーターに期待すること—保護者との連携を中心に— 特別支援教育コーディネーター研究, **1**, 25-31.
- 吉利宗久・林 幹士・大谷育実・来見佳典 (2009). 発達障害のある子どもの保護者に対する支援の動向と実践的課題 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, **141**, 1-9.

謝辞 本研究データの収集にあたり、ご協力くださった、幼稚園、小・中学校、特別支援学校の先生方、および関係者のみなさまに、心より感謝致します。

Problem of cooperation between teachers and parents who have children with special support needs:

: How can teachers work for parents' support needs?

Motoko Miyake

This study aimed to report the difficulty that teachers of kindergarten, primary school, and junior high school working with children with developmental disorders were faced to, to support parents, and teachers' efforts and strategy to support the parents. The results showed that parents' support needs which annoyed teachers were partially result from lack of agreement, among parents and teachers, about comprehension of children's difficulty and goals and methods of education and support for children, as well as insufficiency of efficacious support method. Over 80% of teachers felt difficulty from discrepancy between parents' support needs and actual support which teachers can provide in the school. To reduce the discrepancy, teachers made effort to frequently exchange communication with parents, learn, with parents, about developmental disorders and skills to support children with developmental problems, make relationship among parents, increase their support skills and elicit cooperation from school staffs.